

救急搬送患者の死亡率低下

やまなし

医療最前線

県立中央病院から

《 140 》



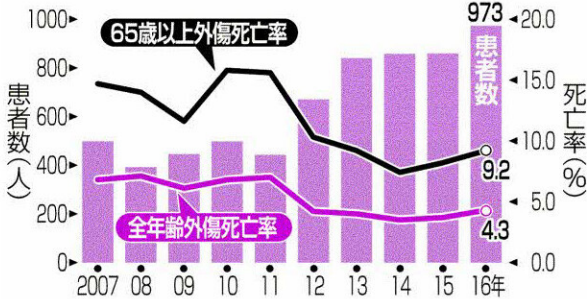
宮崎 善史
救急科部長

同センターへの搬送患者数はドクターヘリ導入前の11年が1112人だったのに対し、16年は2258人で倍増した。ドクターヘリの出動件数は13年以降約400

題となっている。一方、救急搬送された高齢者の命をいかに救うかが課題となっている。一方、救急搬送された高齢者の命をいかに救うかが課題となっている。一方、救急搬送された高齢者の命をいかに救うかが課題となっている。一方、救急搬送された高齢者の命をいかに救うかが課題となっている。

現場情報で早期治療開始

県立中央病院に搬送された外傷患者数と死亡率



500件で推移。医師が乗って現場へ急行するドクターカーは10年8月から運用を始め、出動件数は13年以降500件を上回っている。

救急科部長で同センターの宮崎善史医師によると、救急搬送された重症患者を疾患別で見ると、交通事故や転落などによる重症外傷が最も多く、心肺停止、重症脳血管障害、重症心・大血管疾患と続

く。

全年齢の外傷による死亡率は11年まで6〜7%だったが、12年以降3〜4%と低下した。背景について宮崎医師は「搬送から治療までの効率化に努めている」と説明する。ドクターヘリやドクターカーで現場に赴いた医師が、患者の情報や必要な治療をいち早く同センターに連絡。センターでは人員と物品を準備し早期に治療できる体制を整える。また従来の手術に加え、カテーテル治療を併用するケースが増加。「治療の幅が広がったことも死亡率低下につながった」とみている。

課題は高齢者の死亡率低下。65歳以上の外傷による死亡率は12年以降も7〜10%と下げ止まっている。高齢者は全身の機能低下や合併症によって治療効果が得られないこともあり、軽微な外傷で亡くなるケースもあるという。宮崎医師は「できることはすべてやっていく。限界はあるが、高齢者も含めていかに死亡率を下げるか、限界に挑戦していきたい」と話している。

Ⅱ第2、4木曜日に掲載します